＜論文＞

映画にみる「満洲国」
―『迎春花』のスポーツをめぐって―

林　　樂　青
東亜大学大学院　総合学術研究科　人間科学専攻
dalian00051@yahoo.co.jp

＜要　旨＞

株式会社満洲映画協会（以下満映と略）は、1937 年から 1945 年までの 8 年間に大量の映画を作った。製作作品には、当時の「満洲」における社会文化の諸要素が多く取り入れられており、「満洲国」の社会の実態を究明する貴重な映像資料である。これらの映画は日本の敗戦とともに散逸し、最近各地で発見されるにつれて研究も徐々に増えつつある。その研究の多くは国策映画としてプロパガンダ性が強調されているか、あるいは、元満映社員の自伝や回想録などの分析が主である。

本稿ではそれらの先行研究を踏まえて、現存の満映の代表作品である『迎春花』を研究対象とし、映画に出ている「スケート」、「ホッケー」、「スピード・スケート」、「フィギュア・スケート」、「剣道」、「テニス」、「ゴルフ」、「踢毽子（ティージェンズ）（羽根蹴り）」や「ソリ遊び」など、当時の「満洲」におけるスポーツを分析し、映画の製作目的を究明するとともに「満洲国」の社会実態の一面を明らかにする。

キーワード：満映、『迎春花』、映画、スポーツ

1. はじめに

1932 年日本は日本人を始め、漢族・満族・蒙古族・朝鮮族と合わせ、いわば「五族協和」の建国理念を唱え「満洲国」を作りあげた。「満洲」[1]は中国東北三省（黒竜江省、吉林省と遼寧省）のほかに、熱河省を含めた地域を指す[2]。教育施設も少なく、就学率も 1903 年においてはわずか 3 割程度であった[3]。当時、建国理念の宣伝手段として新聞、雑誌、ビラ、ラジオや映画などが使われたが、映画が最も効果的な宣伝手段であるとされ、1937 年 8 月に株式会社満洲映画協会（以下満映と略）が設立された。満映は「満洲」と満鉄が半分ずつ出資して作った国策映画会社であり、映画の製作だけでなく、配給・映写業務も兼ねており、各地で映画館の設立、巡回映写なども行った。配給エリアは「満洲」、中国の日本占領地や東南アジアにおける日本の占領地域などに及んだ[4]。満映の作品は娯民映画（劇映画）、啓民映画（文化映画）と時事映画（ニュース映画）の三種類に分けている[5]。俳優は李香蘭以外、全員中国人であったが、監督や技術者などはほぼ日本人であった。満映は自主的に映画を製作したほかに、当時の日本映画会社の東宝・松竹と提携し、共同映画も製作した。満映の初代理事長は清朝皇族である粛親王善耆の第七子の金壁東であったが、実権は満鉄映画製作所出身の専務理事林顕蔵が握っていたと言われており、二代目の理事長は甘粕正彦であった。

今まで「満洲」に関する研究に映画を研究対象としたものは数少ないが、それは現存する映画が極めて少ないからであろう。満映が製作した作品は千本近くあったと言われるが、1990 年代に発掘され、現在までに公開された作品は約 30 本である。近年、満映に関する研究は日中両国で徐々に増えつつある。中国では主に満映が戦時中における日本の統治手段であったという点が強調されている（程季華ら 1963 等）。日中戦争のなかで創設された満映が国立映画会社としてプロパガンダ的であったことは否定できない。しかし、作品には娯楽性を持ち合わせた「娯楽映画」もあった。日本語・中国語が混用され、「満洲」の生活を反映する町の風景や庶民の衣食住などのシーンが大量に含まれており、これらに関する研究は殆ど行われていない。一方、日本では満映の作品を国策映画として位置付けされ、人物の自伝・回想録（筈見 1951 等）、映画史（佐藤 2004 等）、映画評論（山口 2000 等）など多様なアプローチがあるが、作品の紹介に留まっているのが現状である。管見では満映の作品は「満洲」の実態を究明する貴重な資料ともなりうるが、未だにこれに注目している研究は見当たらない。

本稿では発掘された満映作品の『迎春花』を対象とし、映画に映された文化現象の中でスポーツに関する内容を分析し、「満洲」の社会実態の中でもスポーツについて明らかにする。

2. 満映と『迎春花』

まずは、『迎春花』の内容について概略を紹介しておこう。この映画は 1942 年に満映と日本映画会社の松竹[6]との共同制作によって製作された作品であり、全編の長さが 74 分である。監督は佐々木康[7]、主要俳優は満映の李香蘭[8]、松竹の木暮実千代[9]と近衛敏明[10]である。主人公の日本青年の村川（近衛敏明）は某社の「満洲」支社長の甥であり、「満洲」に赴任してから、歌のうまい「満人」[11]の娘の白麗（李香蘭）と支社長の令嬢の八重（木暮実千代）との三角関係が生ずる。内容的には恋愛物語である。

Monaco（2009）の映画の分析方法により、映像の意味は外示と共示に分けることができる。外示、デノテーション（denotation）とはある表現（言葉、映像、記号）のそのものの意味である。つまり画像の表面に見えているとおりの外面的意味である。共示、コノテーション（connotation）とはある表現（言葉、映像、記号）の一義的な意味を超えた暗示、比喩、象徴あるいは連想等による意味である。

映画には様々な文化要素が含まれている。これらの要素を分析する際に、分かりやすく説明するため、『迎春花』の全体流れをカッティング・イン・アクションにより 12 のシークエンスに分けて、それぞれにタイトルを付けた。各シークエンスの内容を簡単にまとめると以下のようになる（表 1 参照）。

表１　『迎春花』のシークエンス分け

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Title	満洲の冬の運動	村川の下宿探し	村川の初スケート	白麗家での夕食	二回目のスケート	書道の鑑賞	剣道を教え、スケートを習う	八重への注意	二人の探り合い	中国語の勉強	ハルビンでの三人	剣道を教え続ける
Timer	00:01:18-00:02:38	00:02:39-00:14:15	00:14:16-00:16:59	00:17:00-00:33:52	00:33:53-00:38:05	00:38:06-00:40:45	00:40:46-00:42:11	00:42:12-00:50:38	00:50:39-00:53:22	00:53:23-00:55:55	00:55:56-01:12:35	01:12:36-01:13:29

シークエンス１「満洲の冬の運動」
　屋外スケート場でスケートやアイスホッケーなどを楽しむ人々がいる。

シークエンス２「村川の下宿探し」
　渡満した新人社員である村川は、同僚の白麗の手伝いで満人の家に下宿する。

シークエンス３「村川の初スケート」
　村川は従妹の八重に誘われ、「満洲」で初めてのスケートに挑戦する。

シークエンス４「白麗家での夕食」
　村川は白麗の家で夕食をご馳走になった。食後、白麗は村川に「迎春花」を歌って聴かせる。

シークエンス５「二回目のスケート挑戦」
　村川は満州で二回目のスケートに挑戦したが、やはり失敗する。

シークエンス６「書道の鑑賞」
　支社長は自分の家で、白麗の父親と中国の書道を鑑賞する。

シークエンス７「剣道を教え、スケートを習う」
　村川は下宿先で大家の息子に剣道を教えてから、白麗にスケートを教わる。

シークエンス８「八重への注意」
　村川は会社でホッケーの試合に出る八重に対する同僚の不満を耳にし、八重に注意する。

シークエンス９「二人の探り合い」
　八重と白麗は村川に対する相手の気持ちを探り合う。

シークエンス10「中国語の勉強」
　村川は下宿の家で、大家の娘に中国語を教わっている。

シークエンス11「ハルビンでの三人」
　白麗は村川と哈爾浜へ出張する際に八重を同行するように誘ったが、結局村川は八重と仲直りができず、三人はバラバラになる。

シークエンス12「剣道を教え続ける」
　一人ぼっちになった村川は、「満洲」で引き続き中国人に剣道を教える。

3. スポーツ

映画の流れを貫くスポーツ、つまりスケート、アイスホッケー（以下ホッケーと略す）、スピード・スケート（以下スケートと略す）、フィギュア・スケート（以下フィギャアと略す）、テニス、ゴルフ、蹴毽子（ティージェンズ）[12]、ソリ遊びや剣道などを取り上げ、映像或いは台詞を通じて分析する。

3.1 スケート

スケートに関するシーンが４回出てくる。１回目は「満洲の冬運動」というシークエンスに出ている。（図 1－1）。映画の最初は黒い煙が出ている煙突と建物の場面で、その建物の前にスケート場がある。スケート場で 20 人余りの人たちがスケートをしている。大人だけではなく、子供もいる。スケートを楽しんでいる人々の姿が映されている。

２回目は「村川の初スケート」というシークエンスに出ている（図 1－2）。八重の誘いに応じた村川は、自信満々に初スケートに挑戦したが、転んで失敗する。白麗と八重は村川をからかい、転んだ村川のところに男の子が滑ってきて、村川を嘲笑した。

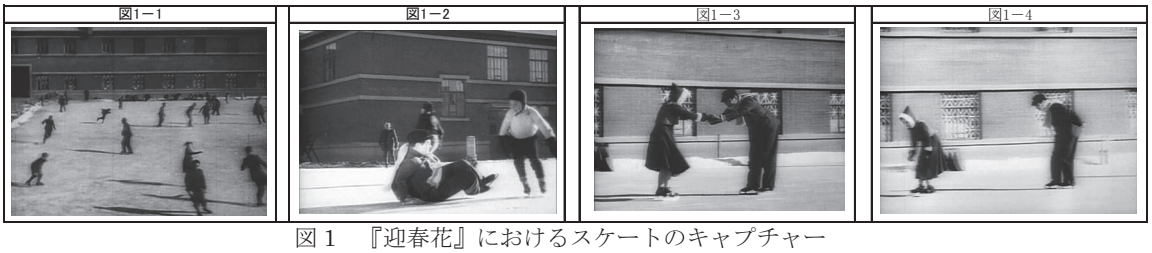

図１　『迎春花』におけるスケートのキャプチャー
（資料出所：『迎春花』（1942）株式会社満洲映画協会作品）

3 回目は「二回目のスケート」というシークエンスに出ている（図 1－3）。八重に勧められた村川はもう一度スケートに挑戦したが、やはり失敗する。転んで這っているところに白麗がやってくる。スケートをやめないという村川の決意を聞いた白麗は、村川の手を取りながらスケートを教えている場面である。

4 番目は「剣道を教え、スケートを習う」のシークエンスに出ている（図 1－4）。村川は大家の息子に剣道を教えてから、スケート場で白麗にスケートを教わり、やっと上手に滑れるようになるという内容である。

映像のほかにスケート或はスケートを意味する台詞が 12 のシークエストのうち、九つのシークエストに現れている。

最初のシーンは村川が下宿先を探す途中で白麗と交わす会話である。

場面❶　白麗：もちろん、スケートもお上手なんでしょう？
村川：ええ、一応は
……（中略）
白麗：スケートやらなきゃ、もうもぐりですよ。
村川：そうですか。もぐりですかね。

この会話には「スケート」という台詞が 2 回出ている。また、「スケート」のできない人は「満洲」では「もぐり」と言われることから、「満洲」においてスケートは一般的なスポーツであるということを示す。

つぎは、村川が自分の部屋で八重との会話である。

場面❷　八重：武雄さん、すこしは滑れるの？
村川：すこしは失礼だろう。
八重：じゃ、滑れるの？
村川：もし滑べれなきゃ、もぐりじゃないか。
八重：あ、そう。お見逃れしまして、どうも失礼！

この会話には「スケート」という台詞は出ていないが、「滑れる」という言葉が重複して使われ、「スケート」の意味を表している。ここの「もぐり」は村川が白麗から言われた「もぐり」を受けてそのまま転用したものである。

次は村川が初スケートに挑戦する場面である。

場面❸　白麗：村川さんもいらっしたのね。
村川：満洲に来て滑れなきゃ、もぐりだからね。
……（中略）
八重：あら、武雄さん、滑れなきゃ、もぐりだなんて…
武雄：だから、すべったじゃないか。

この会話では「スケート」の代わりに、「滑れる」、「滑る」といった台詞が使われている。ここの「すべった」はスケートをして転んだという意味である。また、「もぐり」という言葉が２回出ているが、２回目の「もぐり」は八重が村川の言葉を引用し、村川をからかう意味が含まれており、観客の笑いを誘う脚本の意図がある。

村川はスケートに挑戦した翌日、社内で椅子から立ち上がりながら、白麗と会話する。

場面❹　村川：あっ、痛っ！
白麗：大丈夫？
村川：僕は決して懲りていませんよ。

（腰が）「痛っ」と「懲り」という台詞は「スケート」と関係のない言葉であるように思われるが、実は「痛い」は「スケートで転んだせいである」という意味であり、「懲りない」とは「スケートをやめない」という意味を示していると思われる。

また、八重が村川に電話を掛ける時、これと同じような台詞が出ている。

場面❺　八重：あ、武雄さん、私八重。東京から荷物が来ているわよ。…（中略）えっ、お腰？あれぐらいで痛いんじゃもぐりよ。我慢して取りにいらっしゃいね。…（略）

その次、八重とお母さんとの会話にも同様な台詞が出ている。

場面❻　河島夫人：どう、武雄さんいた？
八重：腰が痛いとか、転んだとか言って、相変わらずのんびりしたいと言ってるよ。…（略）

この二つのシーンでも「お腰」、「痛い」と「転んだ」という台詞が使われており、スケートのことが暗示されている。

次のシーンは八重が村川の部屋で文句を言った後、スケートに誘う会話である。

場面❼　八重：私、馬鹿ね、怒ったりして。ねえ、武雄さん、片付いたらスケートに行かない？
村川：スケート？
八重：もう滑れなきゃ、もぐりよ。
村川：よし、もぐりといわれちゃ武士の面目にかけて二度となるまい。

この会話でも「スケート」、「滑れる」という台詞が使われているが、「スケート」の重要性が再度強調されている。ここには「もぐり」という台詞が２回使われており、「満洲」の社会に溶け込むには「スケート」の重要性が強調されている。

二度目のスケート挑戦に失敗した村川は、氷の上で四つん這いになっているところに白麗がやってきた時の二人の会話である。

場面❽　白麗：村川さん、おはよう。
村川：君か、おはよう。
白麗：もう滑って転んだね。
村川：転んで這ってるんだよ。
白麗：ハハ、もうやめるの？
村川：いや、武士道の手前やめられないよ。

ここの「滑って」とは「スケートする」と「失敗した」の二つの意味が含まれている。また「転んだ（で）」とは「スケートに失敗した」という意味であり、「やめる」はスケートをやめるという意味である。これらの台詞はいずれも「スケート」のイメージを観客に印象づけようとしている。

最後に「スケート」の台詞が出るシーンは、会社で村川と同僚の王との会話である。

場面❾　王　：スケート、うまくなりましたね。この調子で上手になって、僕たちのホッケー部に入ってくれるといいんですが。
村川：おお、それは入ってやってもいいんですよ。
…（中略）
王　：…（前略）でも、ようよう滑れるようになったばかりですから、無理でしょう。…

この会話に「スケート」と「滑れる」という台詞が出ているが、主人公以外の人物の会話にも「スケート」という台詞が出ている。

このように、『迎春花』では「スケート」に関するシーンは四つあり、「満洲」のスケートの実態がそのまま映されており、観客に視覚的に強いイメージを与えている。村川のスケート練習をめぐり、「スケート」に関する台詞が九つのシーンに使用され、そのほかに、「滑れる」、「滑る」、「転ぶ」、「懲りる」、「這う」、「やめる」や「痛い」等のような「スケート」に関連した言葉も使われている。さらに、「もぐり」という台詞は五つのシ

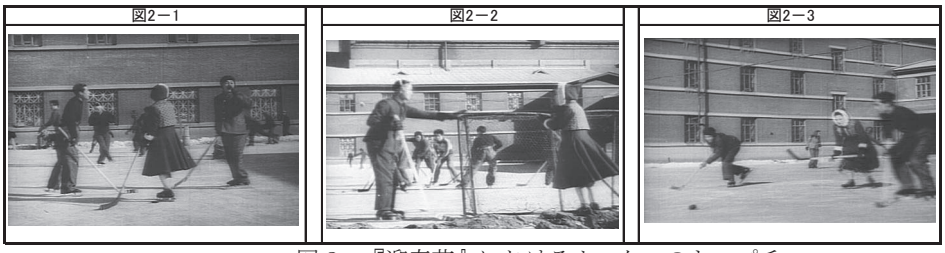

図２　『迎春花』におけるホッケーのキャプチャー
（資料出所：『迎春花』（1942）株式会社満洲映画協会作品）

ーンで 7 回も使用されていることから、「満洲」における「スケート」の流行が強調されている。

3.2 ホッケー

「ホッケー」という要素は「スケート」と同様に、映像と台詞の両方に出ている。「ホッケー」に関するシーンは三つある。

まず、「ホッケー」に関する最初のシーンは「満洲の冬の運動」のシークエンスに出ている（図 2－1）。スケート場でホッケーを練習する人々の姿が映されている。白麗が二人の仲間と一緒にホッケーの練習をしている。練習を終えて一人の男がみんなに「時間だぞ」と告げるシーンである。

2 番目のシーンは「村川の初スケート」のシークエンスに出ている（図 2－2）。村川が初スケートに挑戦する前は、白麗が同僚と一緒にホッケーを練習するシーンである。ホッケーゴールのところで、白麗がホッケー部員と会話をするシーンである。

3 番目は「二回目のスケート」のシークエンスに出ている（図 2－3）。八重に誘われた村川が二度目のスケートに挑戦する前に、スケート場にはホッケー選手の練習シーンがある。ホッケー練習場の端で座っている白麗のところに、ホッケー部員はやってくる。八重の代わりに出場してほしいと誘われて、白麗がみんなと一緒にホッケーを練習する内容である。

この三つのシーンは白麗のホッケー出場をめぐって展開されているが、「満洲」のホッケー事情、とりわけ女性がホッケーに参加していることを強調し、さらに、観客に「満洲」のスポーツの「先進性」を印象づけさせている。

映像以外に、「ホッケー」という台詞は会話のシーンに何回も出ている。最初に出るのは白麗とホッケー選手との会話である。

シーン❶ホッケー選手：白小姐，这次冰球比赛有她出场呢！（白さん、今度のホッケーの試合、八重さんが出るんだよ。）[13]

白麗：啊，YAE 小姐吗？（あら！八重さんが？）

ホッケー選手：嗯。自从 OKUDA SAN 转勤到东京本社以后，我们的队里就短一个人。替她的事，我想 YAE 小姐出场还不如白小姐出场的好。（OKUDA さんが東京本社へ勤務になってから、うちのチームに一人足りないんだ。代わりに八重さんより滑り上手な白さんに出てほしいんだ。）

白麗：哪儿的话啊，她比我强得多了！（そんなことないわ。彼女は私よりずっと上手だわ。）

ホッケー部員：唉，我的意思是，要是白小姐能参加队里的话，是不会错的。（僕は白さんが試合に出ればきっと勝つと言ってるんだ。）

このシーンの会話は全て中国語であるが、その中には「冰球（ホッケー）」、「队里（ホッケー）

チーム」「出場（ホッケー）試合に出る」、「強（ホッケーが上手）」と「参加（ホッケーチームに参加）」などの「ホッケー」に関する中国語の台詞を使っており、ホッケーのことを観客に印象づけている。

次は川村の部屋で村川と八重の会話である。

シーン❷八重：私、このホッケー試合に出るのよ。
村川：ホッケー試合、君が？え～、女もホッケーをやるんだったのかな。

ここでは「ホッケー」という台詞が 3 回も出ており、「満洲」では女性もホッケーをやることを強調し、「満洲」のスポーツの「先進性」を暗示していると思われる。

３回目は「村川の初スケート」のシークエンスに、白麗がホッケー選手との会話のシーンである。

シーン❸ホッケー選手：白小姐，你滑的真漂亮啊。你既然能滑得这样，这次冰球大会你下场还是比 YAE 小姐下场好得多呢。（白さん、ほんとに上手だね。今度のホッケー試合は八重さんに是非出てもらいたいんだ。）
白：我要是在滑得再快点的话……（私はもっと上手にできなくちゃ。）
ホッケー選手：唉，你已经比 YAE 小姐……（ほんとに上手だよ。）

ここでは、「漂亮（ホッケーが上手）」、「冰球大会（ホッケー試合）」、「下场（ホッケー試合に出る）」と「滑得再快点（もっと上手にできる）」などの台詞を使って、白麗のホッケー試合に参加することを強調している。

4 回目は村川が「二回目のスケート」に挑戦するシークエンスに出ている。白麗はホッケー選手との会話に「ホッケー」の台詞に出ている。

シーン❹ホッケー選手：…（前略）你替 YAE 小姐下场怎么样啊？（八重さんの代わりにホッケーの試合に出たらどうですか。）
白麗：那对 YAE 小姐不太好吧。（それは悪いわよ）
ホッケー選手：…（前略）白小姐，你也不是很愿意下场的吗？（白さんもホッケーの試合に出たいでしょう。）
白麗：哦，那么我替她滑一会儿吧。（じゃ、私ちょっとやって来るわ）

ここでは、「下场（ホッケーの試合に出る）」と「滑一会儿（ホッケーをやってくる）」という台詞によって「ホッケー」を観客に印象づけしようとしているのが分かる。

つぎは、村川と同僚の王の会話である。

シーン❺王　：「この調子で上手になって、僕たちのホッケー部に入ってくれるといいんですが。」
村川：おお、それは入ってやってもいいんですよ。
（中略）
王　：来年は入ってください。
村川：来年の事を言うと鬼に笑われるよ。
王　：実は、今年入ってもらえるといいんですが。…（中略）だからうちのチーム荒海にお嬢さんが入ってくれたんですよ。でも、お嬢さんじゃ。白麗のほうが上手なんですが、お嬢さんに遠慮してるんです。

このシーンでは「ホッケー部」と「（ホッケー）チーム」といった台詞を使用している。さらに、外食先で村川が白麗との会話のシーンにも「ホッケー」に関する台詞が出ている。

シーン❻村川：あ、白麗さん、あんたホッケー素晴らしくうまいんだってね。
白麗：いいえ。それほどでもありませんわ。ただ、まねごと。
村川：いや、本当は今度の試合、貴方が出る気だったのでしょう。ところが八重君が支社長の娘だなんていうんで、遠慮してるんじゃありませんか。
白麗：そんなことはありませんわ。八重さんだって、ともてお上手ですわよ。
村川：そりゃ、八重君だってうまいかもしれないけれど、あなたはそれ以上うまいでしょう。…(略)

このシーンの台詞に「ホッケー」のほかに、「試合」、「出る」、「上手」や「うまい」などの、「ホッケー」に関連する台詞も多く現れる。

つぎは、村川が八重との会話、白麗が八重との会話のシーンにそれぞれ出ている。

シーン❼村川：ねえ、八重ちゃん、君、ホッケーなんか止めない？
八重：なんで？
(中略)
村川：どうせ稽古なら、ホッケーの稽古より奥様の稽古をしたほうがいいと思ってんだよ。
八重：どうしてホッケーの稽古をしていけないの？
村川：それは君が支社長のお嬢さんだからさ。
八重：あら、支社長のお嬢さんはホッケーできないないかしら。
村川：わからないな、君は。じゃ、はっきり言う。君が支社長のお嬢さんだから、下手クソでもみんなが遠慮してるんだよ。白さんは君なんかよりずっとうまいんだよ。みんな、今度の試合に白さんに出てもらいたがってんだ。分かったろう。

シーン❽八重：私、ホッケーを止めようかと思うの。
白麗：どうして？

上述したように、『迎春花』では「スケート」と同様に「ホッケー」に関するシーンが多く、「ホッケー」も重要なスポーツであることが分かる。「ホッケー」の場合は、三つのシーンはあり、「満洲」のホッケーの実態を反映しており、観客に「ホッケー」に対する斬新なイメージを与えていると思われる。八重の「ホッケー」試合の出場という主題をめぐり、「ホッケー」に関する台詞も八つのシーンに出ており、「ホッケー」という言葉のほかに、ホッケー試合に関する「試合」、「チーム」、「出る」といった台詞や「うまい」、「下手クソ」のようなホッケーのレベルに関する言葉が使われている。このように、女性がホッケーの試合に参加することをめぐり、物語が展開されていくことから、「満洲」におけるホッケーの「先進性」を示していると考えられる。

3.3 その他のスポーツ

映画『迎春花』は主人公の村川が満人の白麗と日本人の八重との三角恋愛というストーリであるが、村川と博麗の間ではスケートを、村川と八重の間ではホッケーの試合参加をめぐって物語の展開を繰り広げられていく。スケートとホッケーのほかに、スケートとフィギュアのような氷上運動、日本の剣道、中国の大衆運動である蹴毽子とソリ遊び、テニスとゴルフのような上流社会の運動も含まれている。

3.3.1 剣道

『迎春花』では日本のスポーツである剣道も重要な役割を果たしている。映画『迎春花』では剣道に関するシーンが二つある。

１回目は村川が家主の息子に剣道を教えており、剣道の装備（図 3－1）や稽古のやり方（表図 3－2）などを紹介するシーンである。そのほかに、周りにいる大家夫婦の表情（図 3－3）、白麗と家主の娘の表情（図 3－4）から、剣道に対する中国人が面白く見ていることが表れている。

2 回目は、映画の最後に村川が中国人に剣道を

図 3　『迎春花』における剣道のキャプチャー
（資料出所：『迎春花』（1942）株式会社満洲映画協会作品）

教えるシーンである。このシーンでは、剣道を教える対象が大家の息子以外に、ほかの中国人の男が増えている（図 3－5）。稽古のはじめ（図 3－6）から稽古のやり方（図 3－7）まで詳しく描いているが、特に、稽古に失敗した中国人がほかの中国人の仲間に励まされているショット（図 3－8）は観客に強いイメージを与えている。

剣道を教えるこの二つのシーンは、シーンの長さ（1 回目は 57 秒、2 回目は 53 秒）がほぼ同じであるが、剣道を習う中国人や見学する中国人の人数が 1 回目より 2 回目が増えていることが分かる。2 回のシーンを通して剣道の防具や竹刀の握り方や稽古のやり方など剣道に関する内容が紹介されているだけではなく、見学する中国人の表情から剣道に対する中国人の受け入れ状況が窺える。剣道が日本の文化として異国の地である「満洲」で、如何に融合されていくかことが映像を通じて表している。

3.3.2 スピードとフィギュア

「スピード」と「フィギュア」というスポーツ要素は二つのシーンで表している。1 回目は「満洲の冬の運動」のシークエンスに出ている。建物の前にあるスケート場にスケートなどを楽しむ人々の中に、スピードとフィギュアをしている人も含まれている。

映画の 1 分 21 秒から 1 分 25 秒までの間に、画面の上部に速いスピードでカーブを曲がる男性がある[14]。この男は両手を後ろにして、両足を交互に滑っている。そのスピード、カーブの曲がり方や滑り方などからスピード・スケートであることが推測できる（図 4）。

もう 1 つは同じ場面の前部に同じ滑り方をしている男女がいる[15]。2 人は最初、同じ動作で滑っているが、その後、手を取りあいながら円型を描くような滑り方をしている。この一連の滑る動作から、フィギュアの練習であることが推測できる（図 5）。

スピードとフィギュアは氷上スポーツの一部分

図 4　「スピード」の連続キャプチャー
（資料出所：『迎春花』（1942）株式会社満洲映画協会作品）

図 5　「フィギュア」の連続キャプチャー
（資料出所：『迎春花』（1942）株式会社満洲映画協会作品）

であり、競技スポーツでもある。スピードとフィギュアを取り入れることから、「満洲」における氷上運動が盛んになることを印象づけしようとしている。

3.3.3 蹴毽子とソリ遊び

蹴毽子は今の中国のどこでもよく見られる民間の運動であり、ソリ遊びは中国東北の冬の氷上運動である。両方とも中国の大衆運動である。蹴毽子というシーンは「村川の下宿探し」のシークエンスに出ている。中国人の住宅街を歩いている村川が、5 人の中国人の子供達が道端で羽根を蹴っているのを見て、自分も試してみるシーンである（図 6－1）。

図6－1

図6－2

図 6　「蹴毽子」と「ソリ遊び」のキャプチャー
（資料出所：『迎春花』（1942）株式会社満洲映画協会作品）

ソリ遊びは「ハルビンでの三人」のシークエンスに出ている。氷で覆っている松花江でロシアキリストの洗礼祭が行われている。会場の周りにソリを利用して、客運びをやっている中国人が約 10 人いる。祭りを見学した村川がそのソリに乗り帰ったシーンもある（図 6－2）。

蹴毽子という運動は中国で子供でも大人でも好まれている運動である。ここでは、中国人の住宅街で子供達が何気なく蹴毽子という遊びをしていることから、「満洲」の庶民の生活ぶりを描いているとともに、「満洲」における「民族協和」を印象づけしようとしている。ソリは中国の東北地方における氷上遊びの道具である。ここでは、遊び道具ではなく、客を運ぶ運送道具として取り上げられている。特に、ロシア人の洗礼祭りに「ソリ」という要素が取り入れられるのは、「満洲」の独特な文化を紹介すると同時に、「満洲」における多民族化のことが示されている。

3.3.4 テニスとゴルフ

「スケート」、「ホッケー」、「スピード」、「フィギュア」、「蹴毽子」、「ソリ遊び」と「剣道」といったスポーツ要素は、映像でその実体がそのまま映されているため、観客にとって分かりやすい。しかし、「テニス」と「ゴルフ」のような要素は、スポーツの一部分或いは関連物（ポスター）を利用し、その社会文化の実態を表わしている。

『迎春花』には「テニス」の要素を映したシーンが二つある。最初はスケート場でホッケーの練習が終えた白麗が八重に声をかけているシーンである。このシーンに二本の柱が出ているが、柱の高さと柱間の距離から、テニスの柱であると考えられる（図 7－1）。つぎに、「剣道を教え、スケートを習う」というシークエンスに出ている。白麗が村川の滑りを見守っているシーンにも同じ柱が出ており、柱の下部にネットのような物が絡んでいる。このネットのような物がテニスのネットであることが推測できる（図 7－2）。

「ゴルフ」の要素は「村川の下宿探し」のシークエンスに出ている。村川が下宿先を探すため、町に出るが、街の角にある店の外壁にゴルフのポスターが貼られているシーンがある。このシーンから、「満洲」におけるゴルフという運動の有無が判明できる（図 7－3）。

このように、「テニス」と「ゴルフ」のようなスポーツ要素を映像に取り入れることから、「満洲」の豊富多彩なスポーツの実態を紹介するとともに、スポーツの「国際化」や「先進性」などを観客に印象づけしようとしている。

4.「満洲」のスポーツ実態

ここでは、「満洲」のスポーツの実態について検討しておこう。「スケート」、「ホッケー」、「スピード」、「フィギュア」といった氷上運動は元々西洋のスポーツであり、20 世紀初めごろ、ロシアにより中国の東北地方に伝わってきた[16]。『迎春花』には「スケート」、「アイスホッケー」、「スピ

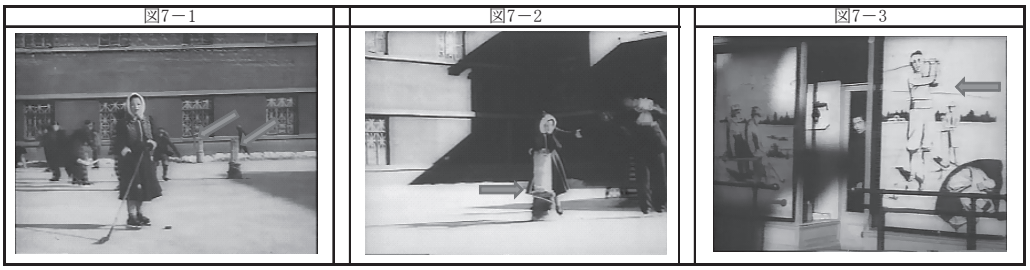

図 7　テニスの柱とゴルフのポスターに関するキャプチャー
（資料出所：『迎春花』（1942）株式会社満洲映画協会作品）

ード」、「フィギュア」、「剣道」、「蹴毽子」、「ソリ遊び」、「テニス」と「ゴルフ」といったスポーツが多くのシーンに映されている。これらの要素は視覚的（画面）、聴覚的（台詞）といった二つの面から、観客に印象づけしようとしている。

まず、「スケート」と「ホッケー」に関するシーンは映画全体において四つのシーンが設けられており、長さは 316 秒（5 分強）である。また、「スケート」と「ホッケー」に関する台詞が頻繁に出ている。映画の全体の流れにこの二つのスポーツが巧妙に組み込まれでおり、「満洲」における「スケート」と「ホッケー」の重要性が強調されている。「スケート」と「ホッケー」のほかに、「スピード」と「フィギュア」といったスポーツも取り上げられており、「満洲」の氷上運動が盛んであることを示している。

実際に当時の「満洲」の氷上運動の状況はどうだったであろうか。「満洲」の成立当時、「建国」の記念事業の一環として、1932 年 4 月 30 日から 5 月 28 日までの約 1 ヶ月にわたり、長春や大連などの地域において 19 箇所で運動会が開催され、参加人数は約 10 万人であり、観客は約 16 万人に達したという。これを機に、「建国記念運動会」は「満洲」の恒例行事として定着し、毎年 5 月から 7 月の間に、「満洲」の各地で開催されるようになった[17]。運動会の目的は「新興満洲国史の劈頭を記念し、体育の和楽裡に、建国に対する国民の意気を昂揚せん」と定められた[18]。

また、1932 年 4 月「建国記念第一回運動大会」の開催とともに、「満洲国体育協会」も創立され、同年 7 月「満洲帝国体育連盟」に改名された。「満洲国体育協会」は運動競技団体の統制機関として 8 箇所に支部を設けた[19]。その以降、「満洲」では年に 2 回（春と秋）に分けて陸上競技の試合を行うほか、冬の氷上競技を開催し、とりわけスピード、ホッケーとフィギュアなどの競技大会を行った。1937 年 1 月開催した「第三回満洲国滑氷選手権大会」では、スピードとホッケーの試合ではハルビンのチームが優勝したが、フィギュアの試合は男女とも新京（現長春）チームが優勝した[20]。

これらの氷上運動は日本にも影響を与えている。『満洲国現勢』（1939）の記録によれば、「満洲」の選手は日本全国体育大会（東京）で、「男子三千米」、「五千米」、「二千米継走」、「女子五百米」、「三千米」などのスピード競技においていずれも日本の新記録を作った。同大会のホッケー試合において、「満洲」チームが優勝し、準優勝は大連チームであった。さらに、同年の全日本氷上選手権大会（青森）のスピード試合では、「満洲」の選手が日本の最高記録を更新した。朝鮮の京城で行われた満鮮対抗総合競技大会のスピード競技でも、「満洲」の選手は男女とも優勝し、ホッケーとフィギュア試合でも優勝したという記録がある[21]。

映画には氷上運動のほかに、「テニス」と「ゴルフ」の文化要素も出ているが、この 2 つの運動の実態を調査してみると、以下のようになる。当時の「満洲」では、テニスが硬式と軟式に分けている。硬式は「全満選手権大会」、「関東州（大連）内外対抗競技会」、軟式は「関東州（大連）内外対抗競技会」、「八大都市対抗競技会」、「全満選手権大会」など、各地で競技会が数多く行われた[22]。また、「満洲」におけるゴルフの事情を調べてみると、「全満ゴルフアマチュア選手権大会」と「プロ選手権大会」も行われ、対抗試合もあったが、出場選手は全員日本人であった[23]。当時のスケートの革靴は舶来品であり[24]、一足 5 円もした[25]。日本企業で働いていた中国人の月給が十何円程度だったということで[26]、スケートの靴を買うのが

相当贅沢なことであるため、普通の中国人にとって無理な運動である[27]。それに、テニスラケットはスケートの皮靴と同じ舶来品であり、値段もスケートの値段と同じであったことから[28]、テニスとゴルフのようなスポーツは上流社会の運動であることが分かる。

西洋のスポーツ文化のほかに、日本の伝統的な「剣道」という体育文化に関するシーンは２箇所あり、合計110秒である。剣道は元々「剣術」として、1911 年日本の中学校の必修科目として指定された。1912 年から 1925 年まで全国の中学校で普及し、後に「剣道」に変名された。第２次世界大戦中、剣道は日本の全ての学校の必修科目と規定され、戦闘技術の一つとして軍事化されていた[29]。「満洲」における日本人学校では剣道を教養科目として設けているが、中国人学校ではそれはなかった[30]。日本人学校に入った中国人は剣道を習ったことがあるが普通の中国人は剣道を習っていない[31]。映画に日本人が中国人に剣道を教える場面を設けることは、「満洲」における日本文化の浸透過程を表している。

西洋文化と日本文化のほかに、蹋毽子とソリ遊びのような中国の大衆文化も紹介されている。「蹋毽子」と「ソリ遊び」に関するシーンは長さがいずれも 15 秒である。蹋毽子は元々中国の大衆運動であり、今でも中国の各地でよく見られる運動である。ソリ遊びは中国の東北地方で独特な氷上運動であり、今でも子供の遊びの一つとして好まれている。映画『迎春花』では満人の「蹋毽子」と、「ソリ」を使って人を運ぶという映像を通して、観客に「満洲」の独特な風俗文化を紹介するとともに、満人の安定且つ歓楽な生活ぶりつまり「王道楽土」を印象づけしていることが考えられる。

このように、映像には大量のスポーツ要素を取り入れられることが、当時の「満洲」の国際政策の一環であったと考えられる。「満州」はスポーツを通して国際社会に承認してもらうため、一連の措置をとった。1932 年のロサンゼルスオリンピックに参加するため、「満洲」は国際オリンピック委員会に参加申し込みを提出したが、拒否された[32]。次に、1934 年にマニラで開催される第 10 回極東選手権競技大会（以下、極東大会と称す）[33] に参加するため、日本の推薦でフィリピンの極東大会準備委員会に申込状を出したが、中華全国体育協進会の反対により、参加できなかった[34]。その後、日本はフィリピンと連携し、第 10 回極東大会の終了をもって極東大会を解散し、またフィリピン、「満洲」と連携して東洋体育協会を新たに設立した[35]。

1934 年以後、「満洲」は毎年日本の全国体育大会に参加するほか、日本の早稲田大学のスポーツ選手も渡満し、交歓試合を行った。1936 年から日満、満鮮の対抗交流試合を定期的に行っていた[36]。さらに、「満洲国」建国 10 周年の慶祝事業の一環として 1942 年 8 月新京（長春）で開催する第二回東亜競技大会に日本、「満洲」、汪精衛政権、タイ、インドネシアとフィリピンなどの選手が参加した[37]。このように、「満洲」は海外（日本と日本の植民地）のスポーツ事業に参加することや、海外とのスポーツ交流などを通して、国際社会の承認を図る一連の措置をとった。『迎春花』は映像を通じて「満洲」におけるスポーツの盛況を海外まで発信しており、当時の「満洲」がスポーツを通して国際社会に進出するという「国策」の一役を果たしたことも考えられる。

5. おわりに

『迎春花』は恋愛映画であるが、当時「満洲」のスポーツを取り入れたことは「スポーツ王道」を宣伝するとともに、「満洲」の国際社会への進出・承認などを狙ったのではないかと推測できる。当時、「満洲」だけではなく、日本でも「満洲帝国建国十周年慶祝映画」[38] として日本と「満洲」で『迎春花』が上映された。1939 年日本で上映された『白蘭の歌』（李香蘭・長谷川一夫）をはじめとする「大陸三部作」により、日本では李香蘭ブームが巻き起こったほどであった。

『迎春花』を日本で上映するには李香蘭の人気を利用するほかなかった。しかし、当時の日本国内の新聞報道による『迎春花』に対する評価は「驚くべき愚作である」、「粗笨極める全体の構成」などであった。また、主人公については、日本人の村川が「低脳児の標本」と、満人の白麗のほうが「遥かにたのもしい」といった批評である。さらに、この映画を「日本人を殊更劇画し笑ひ物にして「満洲」国人の御機嫌を取結ばんとする底意もうかが

はれ、憂慮すべき傾向である」と、日本国内での上映が激しく批判されていた[39]。『迎春花』は娯民映画としては高く評価されなくとも不動な価値を持つものであろう。つまり映画には社会文化要素がそのまま映されており、映画から社会実態の一側面を直観的に読み取ることができた外示的な意味を超えて、当時の「満洲」への曖昧なまた複雑な統治方針を表す映画であったと理解できる。

この作品にはスポーツ以外の社会文化の要素が大量に含まれており、これらの要素を分析することは「満洲」の社会実態を究明する重要な手がかりである。また、他の「満映」作品における文化要素の分析を通じて「満洲」の社会実態を徐々に明らかにしていきたい。

参考文献

1. 筈見恒夫（1951）『映画 50 年史』鱒書房 .
2. 木村荘十二（1952）『新中国』東峰書房.
3. 岩崎昶（1969）『根岸寛一：伝記・根岸寛一』伝記叢書 (300).
4. 坪井与（1984)「満洲映画協会の回想」『映画史研究 19 号』
5. 藤原作弥・山口淑子（1987）『李香蘭－私の半生』新潮社.
6. 山口猛（1995）『満州の記録―満映フィルムに映された満州』集英社.
7. 山口猛（2000）『哀愁の満州映画－満洲国に咲いた活動屋たちの世界』三天書房.
8. 四方田犬彦（2001）『李香蘭と東アジア』東京大学出版会.
9. 四方田犬彦・晏妮（2010）『ポスト満洲映画論―日中映画往還』人文書院.
10. 四方田犬彦（2014）『日本映画史 110 年』集英社.
11. 程季華（1963）『中国電影発展史』中国電影出版社.
12. 胡昶・古泉（1990）『満映－国策電影面面観』中華書局.
13. 胡昶・古泉著、横地剛・間ふさ子訳（1999）『満映－国策映画の諸相』現代書館.
14. 高嶋航（2008)「『満洲国』の誕生と極東スポーツ界の再編」『京都大学文学部研究紀要』pp.131-181.
15. 『満洲建国十年史』満洲帝国政府編，明治百年史叢書 , 第 91 巻，原書房，1969.
16. 林楽青（2015）「偽満電影《迎春花》中的文化浸透和文化侵略」『外語教育研究』pp.54-61.
17. James Monaco（2009），*How to Read a Film: Movies, Media, and Beyond: Art, Technology, Language, History, Theory,* Oxford Univ Pr (T).
18. 崔吉城（2005)「満州映画『虱はこわい』考」『アジア社会文化研究 (6)』pp. 121-136.
19. 王洪・邢楠（2009）「政治・影像――“满映”与电影《迎春花》中的政治隐喻」『社会科学论坛（学术研究卷）』pp.155-158.
20. 李镇（2008）「满目山河空念远 落花风雨更伤春 从《迎春花》试论“满洲映画”的复杂性」『电影艺术』pp.107-112.

[1] 満洲国の傀儡性と正当な国家ではないことを示すため、中国では「偽満洲国」と表記し、日本では括弧をつけて「満洲国」と称する。本稿では「満洲」と略称する。

[2] 小林英雄『＜満洲＞の歴史』講談社現代新書，2008，p.17。

[3] 国聯教育考察団著・国立編訳館訳『中国教育之改進』国立編訳館，1932，p.71。

[4] 胡ら（1999）『満映－国策映画の諸相』による。

[5] 胡ら（1999）『満映－国策映画の諸相』P.50 の言い方による。

[6] 松竹株式会社は、1895 年創業、1920 年松竹キネマ合名会社と帝国活動写真株式会社を設立し、映画製作を開始。戦時中に主にメロドラマを製作した。現在、日本の映画、演劇の制作、興行、配給を手掛ける会社。

[7] 佐々木康は、日本の映画監督である。戦時中に松竹、後東映に属した。早撮りの名人として知られ、松竹時代は歌謡映画、東映時代は時代劇映画など 168 本映画作品が残されている。1993 年死去。

[8] 李香蘭は本名山口淑子。1920 年偽満の奉天（現瀋陽）の郊外で生まれた。両親は日本人であり、当時の瀋陽銀行の頭取であった李際春将軍の義理の娘分（乾女児）として、「李香蘭（リー・シャンラン）」という中国名を得た。日本語も中国語も堪能であり、1937 年絶世の美貌と澄み渡るような歌声で、奉天放送局の新満洲歌曲の歌手として抜擢され、翌年、満映の専属俳優の李香蘭としてデビューした。女優として歌手として、日本や満洲国で大人気を博した。だが、戦時中、中国を侮辱する映画に出演したことで、終戦当時上海で「漢奸罪」で処刑されるところ、日本人の身分を証明したので日本へ引き揚げた。帰国後、1950 年代まで映画界で活躍したが、1970 年から参議院議員へ転身し、1993 年政界引退後、世界の平和のために貢献していた。2014 年死去。

[9] 木暮実千代は 1918 年山口県で生まれ、日本の人気女優として 350 本以上の映画に出演した。1990 年死去。

[10] 近衛敏明は北海道出身で、1911 年生まれの日本俳優。本名は柿崎敏一、旧芸名は近江敏明。

[11]「満人」という言葉は映画の台詞としてよく出ている。当時「満洲」にいる中国人のことを指している。本稿は映画の内容を忠実に再現するため、台詞をそのまま引用する。

[12] 踢毽子とは中国およびその周辺地域で行われている羽根蹴りゲームの羽根である。現代中国では近代的なスポーツとして整備されている。

[13] 括弧の日本語の訳文は筆者の訳した内容である。

[14] 画面を分かりやすく説明するため、筆者が白い□で印した。

[15] 同 14。

[16]『中国近代体育史』（1989）pp.50－56.

[17]『満洲建国十年史』（1969）p.886.

[18] 同上，p.874.

[19]『満洲国現勢』（康徳 2 年版昭和 10 年）p.241.

[20]『満洲国現勢』（康徳 4 年版昭和 12 年）p.495.

[21]『満洲国現勢』（康徳 6 年版昭和 14 年）pp.524-525.

[22]『満洲国現勢』（康徳 3 年版昭和 11 年）p.460.

[23]『満洲国現勢』の資料によれば、康徳三年から始まったテニス満人選手権があり、出場選手の所属は銀行、鉄道、警察や役所関係の中国人であったが、全面選手権、地方対抗選手権、日本・朝鮮との対抗試合での出場選手はほぼ全員が日本人である。

[24]『満洲国現勢』（康徳 4 年版昭和 12 年）p .462.

[25] 2016 年 3 月 21 日、満洲からの引き揚げ者を聞き取り調査した内容に基づく。

[26] 胡昶の『満映』（1991）によると、1939 年まで中国人の俳優の給料は 18 円であった。

[27] 2016 年 10 月 5 日中国の東北で満洲経験の中国人を対象として聞き取り調査の結果、当時、貧しい中国人はもちろん、普通の中国人でもスケートの革靴が買えず、木で作ったスケート道具を使って、スケートを楽しんだという。

[28] 同上。

[29] 林楽青（2015）「偽満電影《迎春花》中的文化浸透和文化侵略」p.56 の内容を参照されたい。

[30] 竹中憲一（2000）『「満州」における教育の基礎的研究』（1－6）の記述による。

[31] 志々田（1999）「「満洲国」建国大学における銃剣道教育」に「建国大学」にいる中国人、台湾人、朝鮮人など銃剣道を習ったという記録があるが、本稿では、満洲経験者の日本人（実施時間：2015 年 8 月）及び中国人（2016 年 5 月）を調査対象として聞き取り調査の結果による。

[32] 同 17，pp.892－895.

[33] 極東選手権競技大会は、アメリカの YMCA から派遣されたエルウッド・S・ブラウンの主唱の基で 1911 年に設立されたフィリピン体育協会の呼びかけによって開催されるようになった。その目的は、各極東諸国の親善と競技力向上であった。当初は 2 年毎に開催されていたが、1930 年からは国際オリンピック大会の間に開催されるよう、4 年毎に実施されるようになる。1934 年解散。

[34] 「本会会議紀録」『体育季刊』第 1 巻第 1 号，1935.

[35] 『満洲国現勢』（康徳 2 年版昭和 10 年）p.242.

[36] 『満洲国現勢』（康徳 2 年版～10 年版）をご参照。

[37] 『満洲国現勢』（康徳 10 年版昭和 18 年）p.608.

[38] 1942 年 3 月 19 日『朝日新聞』夕刊 2P の広告欄に載せた『迎春花』の広告内容である。

[39] 1942 年 3 月 25 日『朝日新聞』朝刊 4P の「新映画評」に載せてある内容である。

附記：本研究は、2016 年度三島海雲記念財団で助成を受けた研究成果の一部である。

Analyzing “Manchuria” Through Films

— Center on Sports of "Ying Chunhua" —

Lin Leqing

Graduate School of Comprehensive Research, University of East Asia,
Division of Human Science

dalian00051@yahoo.co.jp

＜Abstract＞

Manchuria Film Association Co., Ltd was established in 1937 and terminated in 1945. Although more than one thousand films were produced during that time, only more than twenty of them survived and exist till now. These existing films took place in Manchuria, integrating with a great amount of social life. Based on the study of the film "Yingchunhua", this article attempts to represent the society Manchuria through the analysis of sports elements appearing in the film.

Key Words： Manchuria Film Association ; "Yingchunhua"; Film; Sports